

# 全国児童養護施設調査 2015

## 社会的自立に向けた支援に関する調査

-高校生アンケート-

認定 NPO 法人ブリッジフォースマイル

調査チーム

2015 年 12 月

# 2015年 高校生アンケートの結果

## 1. 社会的自立に向けた支援に関する調査

ブリッジフォースマイル（以下、B4S）は2015年6月、全国の児童養護施設を対象に以下のとおりアンケートを実施しました。47都道府県の601施設にアンケート記入をお願いし、173施設の入所中の計1,038人の高校生からご回答頂きました（施設職員の回答は報告書「社会的自立に向けた支援に関する調査-施設職員アンケート-」を参照）。

### ■ 調査の目的

全国の児童養護施設入所中の高校生の実態を知ること、今後の支援の方向性を探る。

### ■ 調査対象者

全国の児童養護施設（601か所）の入所中の高校生。

### ■ 調査の方法

自己記入式のアンケートによる。

### ■ 調査の実施時期

2015年6月から2015年7月まで

### ■ 回答者数

173施設の高校生1,038人。

回答者の主な属性は以下のとおりです。

#### 1-1. 性別

男女比を見ると（表1-1）、以下のようにやや女子が多めとなっています。

表 1-1 回答者全体の男女比

性別	度数	パーセント
男子	475	45.8%
女子	556	53.6%
不明	7	0.7%
合計	1041	100.0%

#### 1-2. 年齢

回答者の年齢は、15～19歳、平均16.27（ $SD=0.97$ ）歳でした（表1-2）。

表 1-2 回答者全体の年齢

年齢	度数	パーセント
15 歳	265	25.5%
16 歳	336	32.4%
17 歳	334	32.2%
18 歳	97	9.3%
19 歳	6	0.6%
合計	1038	100.0%

### 1-3. 学年

回答者の学年は、1～3 年生が 300 人以上ずつ、他 4 年生と不明が約 10 名でした（表 1-3）。

表 1-3 回答者全体の学年

学年	度数	パーセント
1 年	364	35.1%
2 年	320	30.8%
3 年	333	32.1%
4 年	10	1.0%
不明	13	1.1%
合計	1038	100.0%

### 1-4. 施設滞在期間

回答者の施設滞在期間については、1007 名の高校生からの回答を集計した結果、0～17 年 10 ヶ月、平均 7 年 5.52 ヶ月（ $SD=4$  年 9 ヶ月）でした。3 年ごとに分類すると、表 1-4 のような分布になりました。

表 1-4 回答者全体の施設滞在期間

年齢	度数	パーセント
3 年未満	223	21.5%
3 年以上 6 年未満	205	19.7%
6 年以上 9 年未満	171	16.5%
9 年以上 12 年未満	151	14.5%
12 年以上 15 年未満	193	18.6%
15 年以上	64	6.2%
不明	31	3.0%
合計	1038	100.0%

## 2. 将来について

### 主な調査結果

- 希望進路が就職の場合、予想進路も就職を選ぶ高校生が9割以上に対し、希望進路で進学を希望した高校生が予想進路で希望通りの進学先を選ぶのは6~7割。
- 希望進路と予想進路の違う理由の1番は、「お金」が55.9%。
- 進路に対する態度は、「よく考えて自分に合った進路を選びたい」に肯定的な回答をした者が約9割。また、「進路について相談できる人がいる」人が8割以上。多くの高校生が進路に対して積極的に考えている。

### 2-1. 就きたい職業の有無

「将来つきたい職業がありますか?」という質問に対して、「あり」/「なし」で回答を求めました(図2-1、2-2)。全体としては7割強の高校生が「ある」と回答しました。男女別では女子の方が「ある」の回答が比較的多く、学年では学年が上がるにつれて「ある」の割合がやや高くなっています。

図2-1 男女別将来つきたい職業の有無

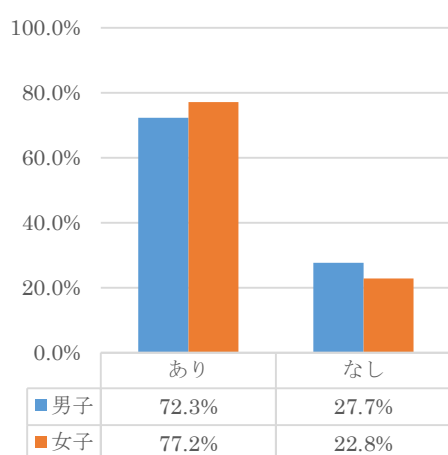
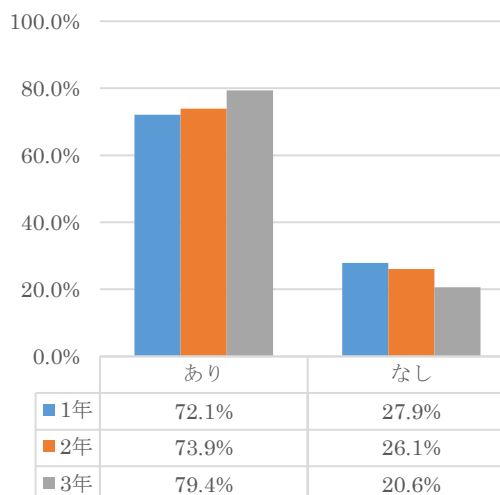


図2-2 学年別将来つきたい職業の有無



### 2-2. 希望進路

「希望する進路(以下、希望進路)」について、「進学(4年制以上の大学)」「進学(短大)」「進学(専門学校)」「就職」「わからない」の選択肢の中から回答を求めた結果、「就職」の割合が一番高い結果となりました。また、男女別に見ると(図2-3)、女子の「大学(短大)」「大学(専門学校)」と回答した割合が、男子と比べて高くなっています。また、学年別に見ると(図2-4)、3年生になると「就職」の割合が上がり、「わからない」の割合が下がっています。

図2-3 男女別希望進路

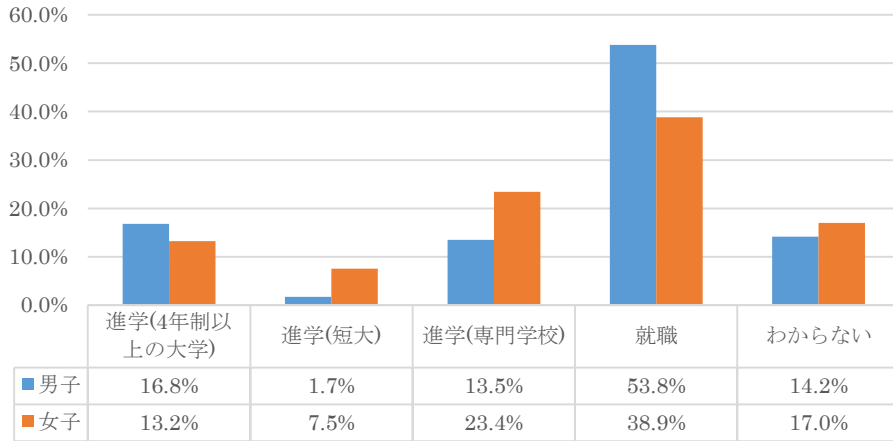
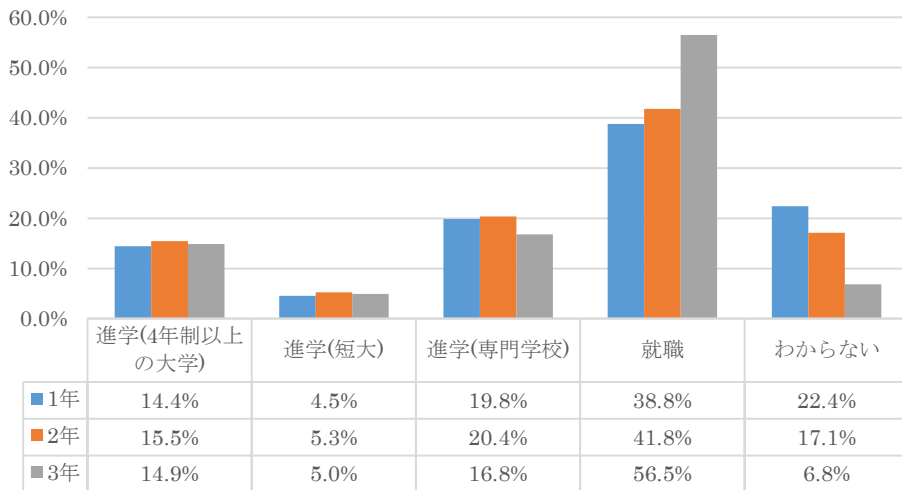


図2-4 学年別希望進路



### 2-3. 予測進路

また、「希望進路」と同じ選択肢を用いて、「予測する進路（以下、予測進路）」についても回答を求めました。全体としては、男女による分布（図 2-5）も学年による分布（図 2-6）も「希望進路」と類似の傾向を示していますが、「希望進路」と比べると「予測進路」において「進学」（4年制以上の大学、短大、専門学校の3種類の回答すべてにおいて）割合が下がっていることがわかります。

図2-5 男女別予測進路

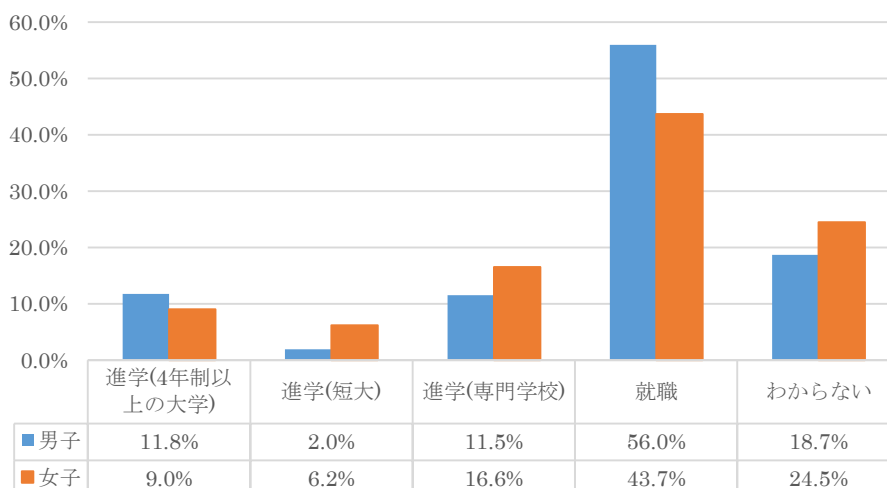
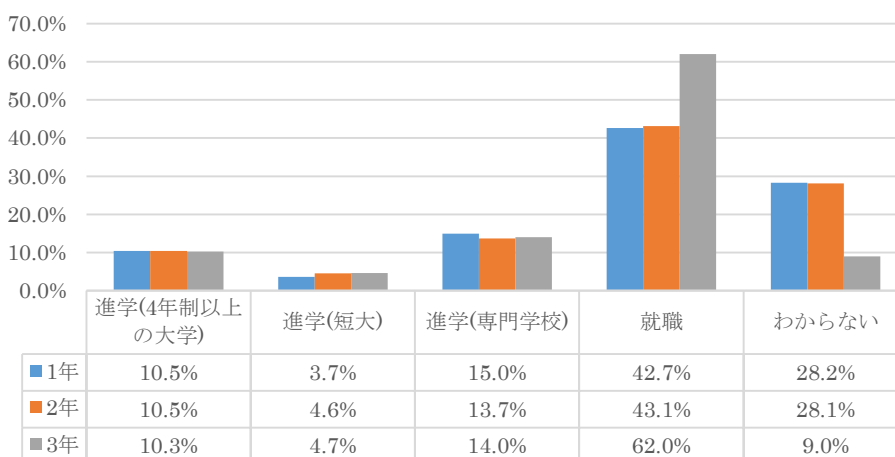


図2-6 学年別予測進路



#### 2-4. 希望進路と予測進路の一致・不一致

希望の進路と予測の進路の組み合わせを検討すると（表 2-1）、希望も予測も一貫して「就職」と答える高校生が最も多いことがわかります。また、進学を希望している人の中では、予測としても希望と同じく「進学」として回答している人（つまり、一貫して「進学」と答える人）が最も多いものの、進学を希望していながら予測の進路としては「就職」や「わからない」を選ぶ、また、4年制以上の大学を希望していながらもより短期の学校（短大や専門学校）を予測として選んでいる高校生もいることがわかります。さらに、希望進路ごとに見てみると、就職を希望しており就職すると予測する高校生が94%であるのに対し、進学を希望していながら予測進路では希望していた進学先を選ばない高校生が6~7割程度に留まることもわかります。

表 2-1 希望進路と予測進路の組み合わせ

希望進路	予測進路	人数	回答者全体に対する割合	各希望進路における割合
進学(4年制以上の大学)	進学(4年制以上の大学)	97	9.3%	65.5%
進学(4年制以上の大学)	進学(短大)	3	0.3%	2.0%
進学(4年制以上の大学)	進学(専門学校)	7	0.7%	4.7%
進学(4年制以上の大学)	就職	9	0.9%	6.1%
進学(4年制以上の大学)	わからない	32	3.1%	21.6%
進学(短大)	進学(短大)	36	3.5%	75.0%
進学(短大)	進学(専門学校)	1	0.1%	2.1%
進学(短大)	就職	3	0.3%	6.3%
進学(短大)	わからない	6	0.6%	12.5%
進学(専門学校)	進学(4年制以上の大学)	2	0.2%	1.1%
進学(専門学校)	進学(短大)	1	0.1%	0.5%
進学(専門学校)	進学(専門学校)	123	11.8%	66.1%
進学(専門学校)	就職	29	2.8%	15.6%
進学(専門学校)	わからない	31	3.0%	16.7%
就職	進学(専門学校)	3	0.3%	0.7%
就職	就職	425	40.9%	94.2%
就職	わからない	23	2.2%	5.1%
わからない	進学(4年制以上の大学)	4	0.4%	2.6%
わからない	進学(短大)	1	0.1%	0.6%
わからない	進学(専門学校)	5	0.5%	3.2%
わからない	就職	21	2.0%	13.5%
わからない	わからない	124	11.9%	80.0%
欠損値	欠損値	52	5.0%	

表 2-1 の結果を整理するために、「一貫進学群」(進学→進学)、「一貫就職群」(就職→就職)、また、希望進路で「進学」を選びながらも予測進路で「就職」または「わからない」を選んでいる人を「進学あきらめ群」(進学→就職, 進学→わからない)、希望が「わからない」人と希望進路で「就職」と答えながら予測進路では「わからない」としている人を合わせて「未決定群」(就職→わからない, わからない→わからない, わからない→就職, わからない→進学)として分類しました(なお、就職→進学を「その他」としました)。表 2-2 を見ると、「一貫就職群」が約 40%と最も多いことに対して、「一貫進学群」は約 26%に留まっています。また、「進学あきらめ群」が約 10%もいることは注目に値します。

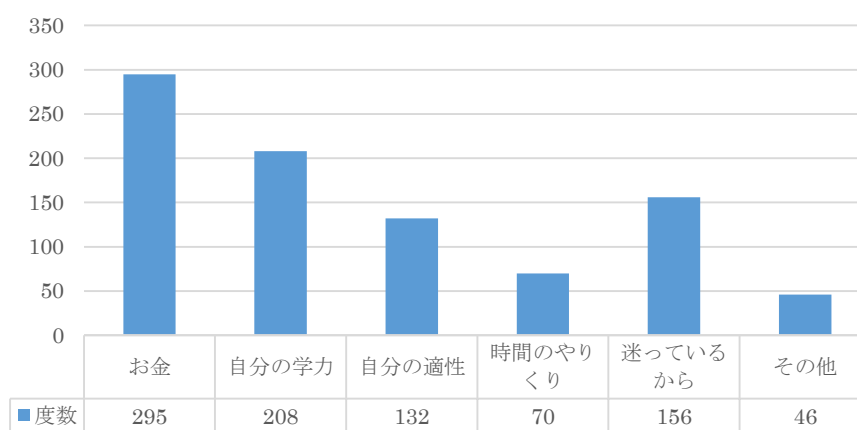
表 2-2 進路の希望と予測の組み合わせから整理した群分け

群	1年生	2年生	3年生	合計	%
一貫進学群	94	82	92	268	27.7
一貫就職群	127	113	175	415	42.9
進学あきらめ群	42	42	25	109	11.3
未決定群	85	64	27	176	18.2

## 2-5. 希望進路と予測進路が違う理由

希望進路と予測進路が違う理由について、複数回答可として回答を求めました。各選択肢が選ばれた度数を見ると、「お金」が 55.9%と最も多く、次いで「自分の学力」、「迷っているから」という選択肢が多く選ばれました（図 2-7）。

図2-7 希望進路と予測進路の違う理由(n=527)

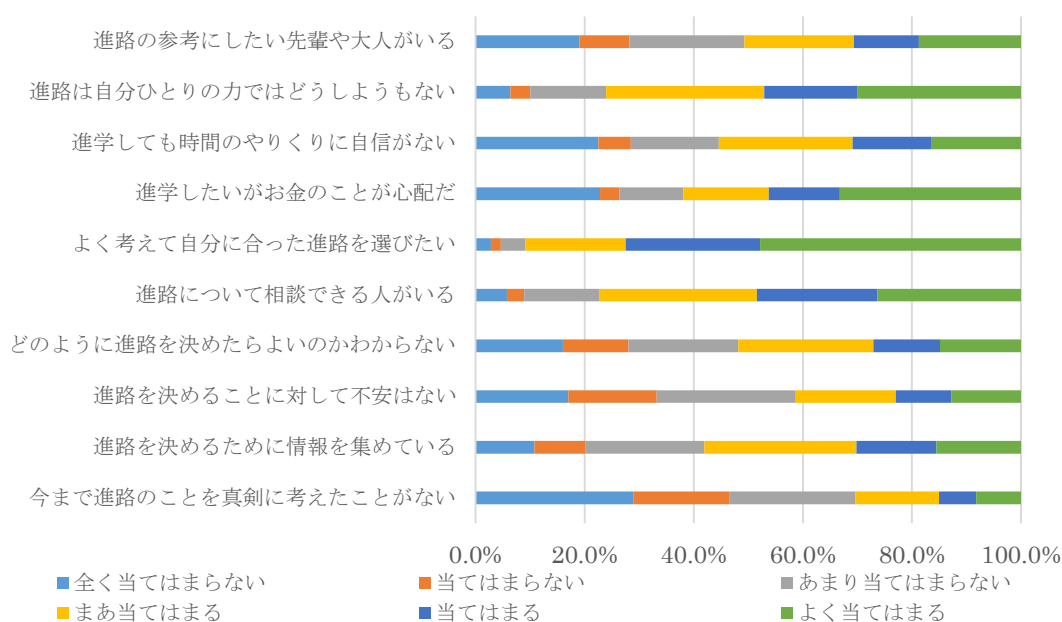


## 2-6. 進路選択に対する態度

進路に対する気持ちや考えについて 10 項目を用意し、自分の考えに当てはまる程度について 6 段階評定回答を求めました（図 2-3）。その結果、「よく考えて自分に合った進路を選びたい」に肯定的な回答をした者が約 90%と多く、また、「進路を決めるために情報を集めている」と回答した高校生も 5 割を超え、多くの高校生らが進路に対して積極的に考えていることがわかりました。また、「進路について相談できる人がいる」人が 8 割以上、「進路の参考にしたい先輩や大人がいる」人が 5 割以上いることから、進路選択についてサポーターがいる高校生も多いようです。しかし、「進路は自分ひとりの力ではどうしようもない」と考える高校生も 7 割以上、「進学したいがお金のことが心配」と答えた高校生が 6 割以上おり、さらに半数が「どのように進路を決めたらよいかわからない」とも回答していることから、進路に関する複雑な感情がうかがわれます。



図2-8 進路選択に関する10項目の回答



各項目の平均値を高校生全体、および、上述の希望進路と予測進路の組み合わせについて分類した4群別に算出しました(表2-9)。得点が高いほど各項目が肯定されたことを意味しますが、項目によって、4つの群に差があることがわかります。たとえば、一貫して進学と答えている高校生ほど、進路について積極的に考えている一方で、お金や時間のやりくりについて心配しています。

表2-3 進路選択に関する各項目の平均値

	全体	「希望進路」と「予測進路」から分類した4群			
		一貫進学群	一貫就職群	進学あきらめ群	未決定群
今まで進路のことを真剣に考えたことがない	2.78	2.21	2.91	2.91	3.32
進路を決めるために情報を集めている	3.73	4.23	3.63	3.97	3.05
進路を決めることに対して不安はない	3.27	3.40	3.49	2.74	2.97
どのように進路を決めたらよいかわからない	3.50	2.95	3.40	3.75	4.31
進路について相談できる人がいる	4.37	4.52	4.48	4.20	4.06
よく考えて自分に合った進路を選びたい	5.04	5.16	5.08	5.20	4.63
進学したいがお金のことが心配だ	3.92	4.86	2.80	5.34	4.05
進学しても時間のやりくりには自信がない	3.52	3.83	2.89	4.23	3.96
進路は自分一人の力ではどうしようもない	4.37	4.22	4.27	4.82	4.49
進路の参考にした先輩や大人がいる	3.53	3.72	3.57	3.34	3.25

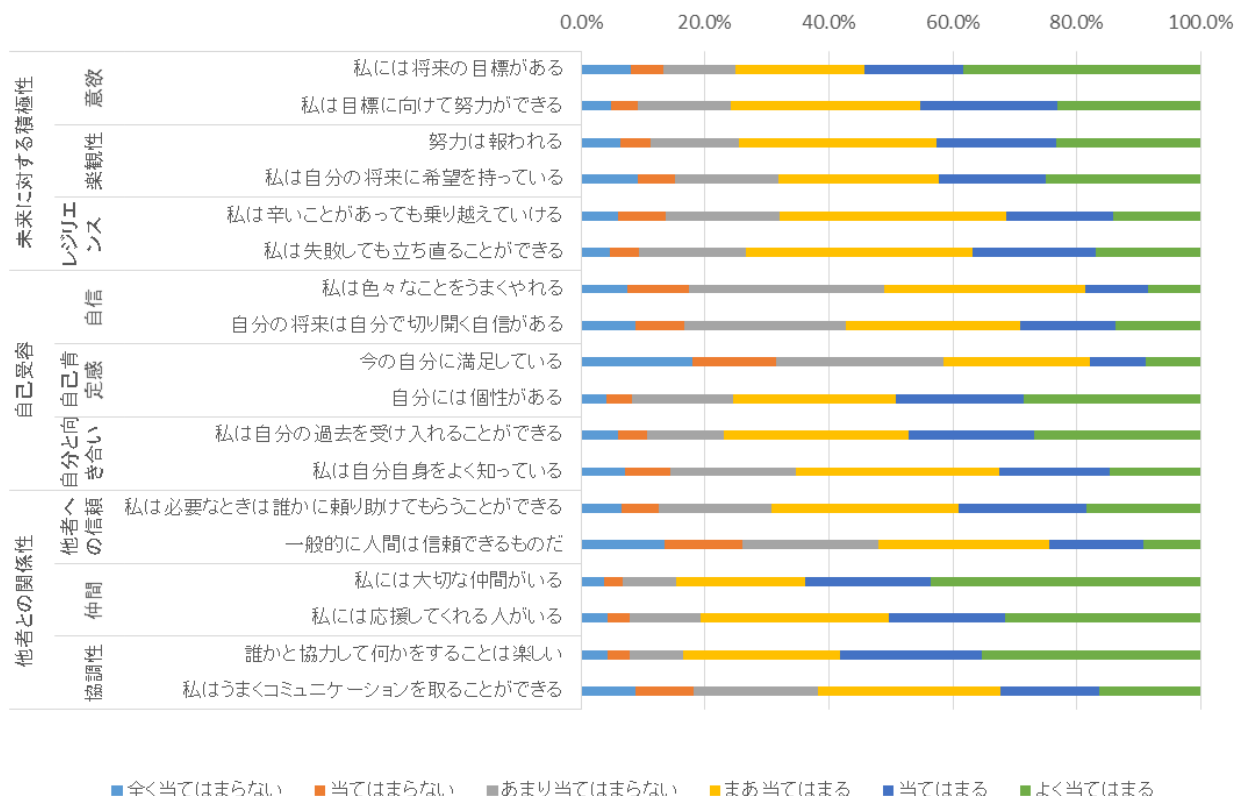
### 3. 高校生の自立に必要と考えられる要素についての検討

主な調査結果	
●	“意欲”、“楽観性”、“レジリエンス”、“仲間”は、高校生が自身に当てはまると考える程度が高い。
●	B4S が自立に必要と考える 18 項目は、ほぼ全項目で施設職員が見た高校生の実態より、高校生の自己認識の方が程度が高い。

#### 3-1. 高校生の回答結果

B4S が自立に必要ではないかと考えている 18 項目を作成し各項目について、「今あなたが感じていることについて、うかがいます。あなたの今の気持ちに最も当てはまると思う番号に○をつけてください」と問い、自分自身にあてはまる程度を 6 段階評定（全く当てはまらない～とても当てはまる）について回答を求めました（同じ項目について、施設職員の方々が「高校生の自立に必要だと思う程度」と「施設の高校生全般にあてはまる程度」もお聞きしました）。いずれもいわゆる望ましい特徴を表わす項目ですが、図 3-1 に示したように、全体として自分に当てはまるとする回答（「よく当てはまる」、「当てはまる」、「まあ当てはまる」）に分類される項目が、自分には当てはまらないとする回答（「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」、「全く当てはまらない」）を上回っていることがわかります。特に、『未来に対する積極性』や『他者との関係性』の中の“仲間”についての項目は「あてはまる」と回答する高校生が相対的に多いことがわかります。

図 3-1 自立に関する 18 項目について自分に当てはまると思う程度



各項目の平均値を表 3-1 に示しました。得点が高いほど自分自身に肯定された程度を示します。「希望進路」と「予測進路」の組み合わせから分類した 4 群に分けてみると、いくつかの項目では「一貫就職群」や「一貫進学群」で平均値がやや高いことがわかります。

表 3-1 各項目の平均値

カテゴリー	項目内容	全体	「希望進路」と「予測進路」から分類した 4 群				
			一貫進学群	一貫就職群	進学あきらめ群	未決定群	
未来に対する積極性	意欲	私には将来の目標がある	4.46	5.26	4.25	4.79	3.43
		私は目標に向けて努力ができる	4.30	4.64	4.32	4.22	3.80
	楽観性	努力は報われる	4.23	4.37	4.25	4.30	3.80
		私は自分の将来に希望を持っている	4.11	4.63	4.08	3.97	3.39
	レジリエンス	私は辛いことがあっても乗り越えていける	3.94	4.09	3.95	3.69	3.81
		私は失敗しても立ち直ることができる	4.13	4.38	4.09	3.91	3.91
自己受容	自信	私は色々なことをうまくやれる	3.53	3.75	3.54	3.39	3.27
		自分の将来は自分で切り開く自信がある	3.75	4.19	3.74	3.46	3.24
	自己肯定感	今の自分に満足している	3.19	3.24	3.31	2.80	3.07
		自分には個性がある	4.41	4.57	4.47	4.31	4.03
	自分と向き合い	私は自分の過去を受け入れることができる	4.34	4.57	4.26	4.28	4.25
		私は自分自身をよく知っている	3.91	4.09	3.95	3.63	3.69
他者との関係性	他者への信頼	私は必要なときは誰かに頼り助けてもらうことができる	4.08	4.24	4.16	3.64	3.89
		一般的に人間は信頼できるものだ	3.46	3.61	3.48	3.16	3.33
	仲間	私には大切な仲間がいる	4.82	4.90	4.91	4.65	4.54
		私には応援してくれる人がいる	4.50	4.64	4.57	4.28	4.19
	協調性	誰かと協力して何かをすることは楽しい	4.65	4.65	4.74	4.58	4.44
		私もうまくコミュニケーションを取ることができる	3.83	4.06	3.87	3.56	3.49

また、各カテゴリーの平均値を表 3-2 で示しました。「希望進路」と「予測進路」から分類した 4 群で比較すると「一貫進学群」と「一貫就職群」が高いことが多いですが、『未来に対する積極性』では「一貫進学群」が高い値を示していることがわかります。

表 3-2 各カテゴリーの平均値

	全体	「希望進路」と「予測進路」から分類した 4 群			
		一貫進学群	一貫就職群	進学あきらめ群	未決定群
<b>未来に対する積極性</b>	<b>4.20</b>	<b>4.56</b>	<b>4.16</b>	<b>4.14</b>	<b>3.69</b>
意欲	4.39	4.96	4.29	4.50	3.62
楽観性	4.17	4.49	4.16	4.14	3.59
レジリエンス	4.04	4.24	4.02	3.80	3.86
<b>自己受容</b>	<b>3.85</b>	<b>4.06</b>	<b>3.88</b>	<b>3.62</b>	<b>3.59</b>
自信	3.64	3.97	3.64	3.42	3.25
自己肯定感	3.80	3.90	3.88	3.55	3.55
向き合い	4.13	4.33	4.10	3.95	3.97
<b>他者との関係性</b>	<b>4.22</b>	<b>4.36</b>	<b>4.29</b>	<b>3.96</b>	<b>3.97</b>
他者への信頼	3.77	3.92	3.82	3.40	3.62
仲間	4.66	4.78	4.73	4.46	4.38
協調性	4.24	4.36	4.31	4.07	3.96

なお、これらの 18 項目は相互に強い関連があり、統計的には 1 つの尺度として扱うことができるものであることがわかりました。B4S では、これらの項目を総じて「自立のために大切な要素」として注目し、支援の道を探っていきたいと思います。

### 3-2. 「職員の考える理想」、「職員から見た実態」、「高校生自己認識」の比較

B4S が独自に考えた自立に必要な 18 項目について、施設職員、施設入所中の高校生別々にアンケートを実施しました。職員から見た高校生と高校生の自己認識にどのような違いがあるか明らかにするために、その結果を比較しました。ほとんどの項目で「職員理想」に対して「実態」および「自己認識」が共に低くなっています。しかしながら多くの項目で、「実態」にくらべて「自己認識」が大幅に上回っています。一方で、「実態」と、「自己認識」に大きな差がなかった項目を見てみると、“自信” “色々なことをうまくやれる”、“肯定感” “今の自分に満足している”、“他者信頼” “私は必要なときは誰かに頼り助けてもらうことができる” “一般的に人間は信頼できるものだ” の 4 つの項目が挙げられます。

図 3-2 「職員の考える理想」、「職員から見た実態」、「高校生自己認識」の比較

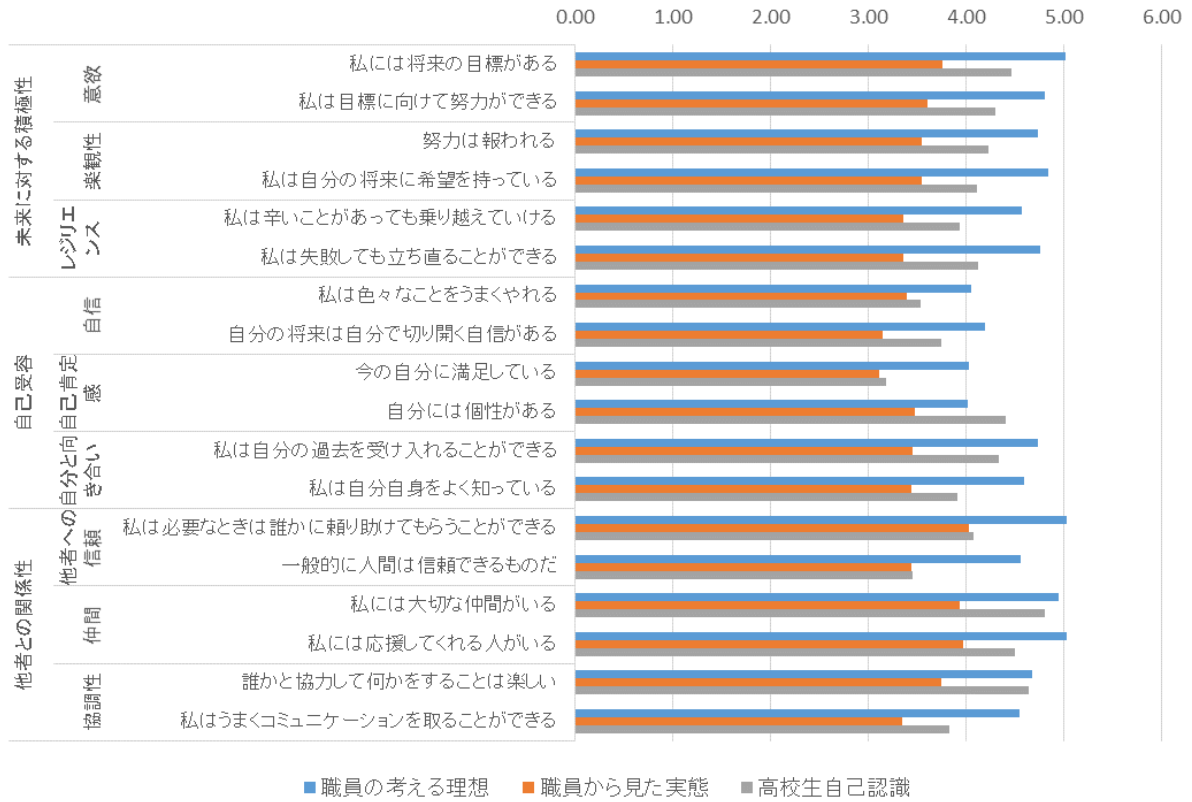


表 3-3 18 項目の数値と、職員の理想を 100%としたときの割合

			数値			割合		
			職員の考える理想	職員から見た実態	高校生自己認識	職員の考える理想	職員から見た実態	高校生自己認識
未来に対する積極性	意欲	私には将来の目標がある	5.02	3.76	4.46	100%	75%	89%
		私は目標に向けて努力ができる	4.81	3.61	4.30	100%	75%	90%
	楽観性	努力は報われる	4.74	3.55	4.23	100%	75%	89%
		私は自分の将来に希望を持っている	4.85	3.55	4.11	100%	73%	85%
	レジリエンス	私は辛いことがあっても乗り越えていける	4.58	3.37	3.94	100%	74%	86%
		私は失敗しても立ち直ることができる	4.76	3.37	4.13	100%	71%	87%
自己受容	自信	私は色々なことをうまくやれる	4.06	3.39	3.53	100%	84%	87%
		自分の将来は自分で切り開く自信がある	4.19	3.15	3.75	100%	75%	89%
	自己肯定感	今の自分に満足している	4.03	3.11	3.19	100%	77%	79%
		自分には個性がある	4.02	3.48	4.41	100%	87%	110%
	自分と向き合い	私は自分の過去を受け入れることができる	4.74	3.46	4.34	100%	73%	92%
		私は自分自身をよく知っている	4.60	3.44	3.91	100%	75%	85%
他者との関係性	他者への信頼	私は必要なときは誰かに頼り助けてもらうことができる	5.03	4.04	4.08	100%	80%	81%
		一般的に人間は信頼できるものだ	4.57	3.44	3.46	100%	75%	76%
	仲間	私には大切な仲間がいる	4.96	3.94	4.82	100%	80%	97%
		私には応援してくれる人がいる	5.04	3.97	4.50	100%	79%	89%
	協調性	誰かと協力して何かをすることは楽しい	4.68	3.75	4.65	100%	80%	99%
		私はうまくコミュニケーションを取ることができる	4.56	3.35	3.83	100%	73%	84%

表 3-4 各カテゴリーの数値と、職員の理想を 100%としたときの割合

	数値			割合		
	職員の考える理想	職員から見た実態	高校生自己認識	職員の考える理想	職員から見た実態	高校生自己認識
<b>未来に対する積極性</b>	4.79	3.53	4.20	100%	74%	88%
意欲	4.91	3.69	4.38	100%	75%	89%
楽観性	4.80	3.55	4.17	100%	74%	87%
レジリエンス	4.67	3.37	4.04	100%	72%	86%
<b>自己受容</b>	4.27	3.34	3.86	100%	78%	90%
自信	4.13	3.27	3.64	100%	79%	88%
自己肯定感	4.02	3.29	3.80	100%	82%	94%
向き合い	4.67	3.45	4.13	100%	74%	88%
<b>他者との関係性</b>	4.81	3.75	4.22	100%	78%	88%
他者への信頼	4.80	3.74	3.77	100%	78%	79%
仲間	5.00	3.96	4.66	100%	79%	93%
協調性	4.62	3.55	4.24	100%	77%	92%

## 4. その他の心理学的尺度の結果

「施設で生活する高校生の心理特性を理解するため、また B4S が設定した項目の妥当性を確認するため、今回は2つの既存の心理尺度を用い回答を求めました。ここでは、それぞれの尺度項目に対する回答の平均値と、B4S の設定した自立に必要なと考えられる要素との関連のみを示します（相関関係であり因果関係ではないため注意が必要であり、今後、さらに詳細に分析を深めていきます）。

### 4-1. 親しい人との関係

親しい人との関係についてどのように感じているかについて、“アタッチメント・スタイル”という概念から検討しました（Experiences Close Relationships- Relationship Structure(ECR-RS)<sup>1</sup>を使用）。この尺度では、親しい人たち全般についてどのように感じているについて問います。9項目について、7段階評定（非常によく当てはまる～全く当てはまらない。「どちらともいえない」が4点）により回答を求めました（表 4-1）。表 4-1 の平均値は、得点が高いほど「当てはまる」と肯定した程度を示します。これを見ると、高校生らが親しい人に対してある程度の信頼感を持っていることがわかります。

表 4-1 ECR-RS の各項目の平均値

		平均値
1.	必要なときは親しい人に頼り助けてもらうことができる	4.50
2.	私は、たいてい親しい人に自分の問題や心配事を話す	4.62
3.	私は、親しい人に個人的なことを相談する	4.66
4.	私にとって親しい人に頼ることは簡単だ	4.15
5.	私は、親しい人に心を開くことを心地よく感じない	3.35
6.	自分が心の奥底で考えていることを親しい人に知られたくない	4.10
7.	親しい人が私のことを本当は大切に思っていないのかもしれないと、たびたび心配になる	3.94
8.	私は、親しい人に見捨てられるのではないかと不安に思う	3.68
9.	私が大切に思っているほど親しい人は私のことを大切に思っていないのではと心配になる	3.65

この尺度は、人間関係に対する「回避傾向」と「不安傾向」の2側面（下位尺度）に分けて捉えます。「回避傾向」とは、人と深くかかわりたくないといった人間関係の深い結びつきを回避する傾向のことです（表 4-1 の項目番号 1～6 番がこの下位尺度に該当、1～4 番は逆転項目）。また、「不安傾向」とは、人間関係の中で不安な感情を感じやすい傾向のことです（表 4-1 の 7～9 番）。2つの側面それぞれについて、先の B4S が考える自立に必要な要素（18項目の合計）との関連を見ると、「回避傾向」とは中程度以上の負の相関（ $r=-.540$ ）、「不安傾向」とは低い負の相関（ $r=-.136$ ）がありました。つまり、特に人間関係を回避する傾向が強いほどこれらの要素を持つ程度

<sup>1</sup> Fraley, R. C., Heffernan, M. E., Vicary, A. M., & Brumbaugh, C. C. (2011). The Experiences in Close Relationships-Relationship Structures questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment*, 23, 615-625. 今回用いた「他者全般」について尋ねる項目は Fraley 自身のサイトから英語版を入手し、日本語訳については戸田弘二先生（北海道教育大学）らによる対象別の ECR-RS の翻訳を許可を得て使用。

が低いという関係があることが示唆されました。

#### 4-2. エゴ・レジリエンス

日常的なストレスに対して柔軟に調整を行い、状況にうまく対処し適応できるとされるパーソナリティ特性として扱われる“エゴ・レジリエンス”という概念から検討しました(Ego-Resiliency 尺度(ER89)<sup>2</sup>を使用)。これらの項目では、状況に応じて自己を調整できる能力を示します。14 項目について、4 段階評定(当てはまる～当てはまらない)により回答を求めました(表 4-2)。表 4-2 の平均値は、得点が高いほど「当てはまる」と肯定した程度を示しますが、高校生らがある程度これらの特徴を持つことがわかります。

表 4-2 ER89 の各項目の平均値

	平均値
私は友達に対して思いやりがあり、親しい関係をもてる	3.05
私はショックをうけることがあっても直ぐに立ち直るほうだ	2.71
私は慣れていないことにも楽しみながら取り組むことができる	2.69
私は人にたいして好印象を与えることができる	2.50
私は今まで食べたことがない食べ物を試すことが好きだ	2.44
私は人からとてもエネルギッシュな人だと思われる	2.33
私はよく知っているところへ行くにも、違う道を通っていくのが好きだ	2.70
私は人よりも好奇心が強いと思う	2.74
私の周りには、感じがよい人が多い	2.95
私は何かするとき、アイデアがたくさん浮かぶほうだ	2.47
私は新しいことをするのが好きだ	2.98
私は日々の生活の中で面白いと感じることが多い	2.75
私は「かなり強い個性」の持ち主であると思う	2.59
私は誰かのことで腹を立てても、すぐに機嫌が直る	2.48

上述の人間関係の尺度と同様に、B4S が自立に必要な要素(18 項目の合計)との関連を見ると、比較的高い正の相関が見出され( $r = .625$ )、強い関連があることが示唆されました。すなわち、これらの要素を持つ傾向が高いほど、ストレスに対して柔軟に対応する力とされるエゴ・レジリエンスが高いという関係があり、これらの 18 項目にはある程度の妥当性があると考えられました。

<sup>2</sup> Block, J., & Kremen, A. M. (1996). IQ and egoresiliency: Conceptual and empirical connections and separateness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 349–361. 日本語版は、畑潮・小野寺敦子 (2013) Ego-Resiliency 尺度 (ER89) 日本語版作成と信頼性・妥当性の検討、*パーソナリティ研究*, 22, 37-47.



## 5. IT 機器について

### 主な調査結果

- 施設高校生のスマートフォン利用率は 40%程度。スマートフォンの利用を許可している施設が約 8 割にも関わらず保持率は低い。

IT 機器に関して、表 5-1 の選択肢を提示し、持っている場合に複数回答可で回答を求めました（さらに、「その他」に書かれた内容を再分類しました）。これを見ると、スマートフォンを利用している高校生が最も多いものの、その保有率は 40%程度と低い値に留まりました。スマートフォンの利用を許可している施設の割合は約 8 割と実際に保有している割合よりも高いことから（施設職員アンケートの結果報告書を参照）、許可されていても費用等が関連して保持していないものと考えられます。総じて、一般高校生と比べてネットに触れる機会は少ない状況にあると考えられます。

表 5-1 各 IT 機器の保有率

	従来型携帯電話 (ガラケー)	スマート フォン	個人 PC/ タブレット端末	ネットにつな がる ゲーム機	その他
保有率	5.9%	40.7%	5.2%	22.6%	11.3%

これらのアンケート結果はさらに各方面からのアドバイスをいただきながら、より深い、詳細な分析を行い、その都度発信していきたいと考えています。

高校生の皆様、たくさんの質問にお答えいただきまして、まことにありがとうございました。